世間解　第四一四号
令和四年八月
発行　西法寺

念仏もうさるべし

ーお経さまの心ー

八月であります。皆さまには暑さと、落ち着かない日が続く中ですが、ご本願のおはたらきの中「なんまんだぶ、なんまんだぶ…」とお念仏ご相続のことと存じます。

こうしてご縁に遇わせていただいた私どもは例えば八月のお盆に、春秋のお彼岸に、ご法事のおりに、毎月のご命日に、先だってくださった方々を偲んでお勤めをさせていただきます。お勤めをする。お経さまを拝読する。お経さまに遇わせていただく。言い方は様々でありますが、口にかけてお経さまを読ませいただいたり、お経の本を見たり、お経さまを聞いたりすることであります。

さて、そこにどんな意味があるのでしょうか。

お経を読む

浄土真宗では江戸時代の後半からこちらにかけてお念仏を慶ばれたお同行を“妙好人”という言葉で尊敬してまいりました。その中のお一人に讃岐の庄松さんと仰がれた方がおられました。今からざっと百五十年前のお方であります。

江戸時代の末にお生まれになった庄松さんは物心がつくと働かねばならず学校（当時ですから寺子屋といわれたところでしょうが）へ行くことが出来ずに成人されてからも文字はほとんど読み書きが出来なかったといわれています。

ところがお寺にご縁があって、お寺参りを続けられる中で、まさに阿弥陀さまに育てられていったというような大変ありがたい念仏者でいらっしゃいました。

お寺のご住職が何かというと庄松さんを引き合いに出して“みんなもあの庄松のようにありがたい念仏者になってくれよ”とおっしゃっていたそうです。

一人のお坊さんがあまりご住職が庄松さんを賞めるので少しねたましく思われたようです。いっぺん庄松さんに恥をかかせてやろうということで、ご法座があったときに庄松さんを前に呼んで、「庄松さん、あんたここの住職からありがたい人や尊い人やといわれてるけど、ほんならアンタお経が読めるか？」とお聞きになります。字が読めないのを知っていて聞いたわけです。すると庄松さんは「おお、読めるわい」とお応えになりました。というのも毎日お寺にお参りされる中で「お正信偈さま」だとか、「阿弥陀経さま」などはしょっちゅうお勤めされますので、聞いて覚えておられたからです。

それを聞いたお坊さん「そうか。ならこれを読んでみよ！」と『仏説無量寿経』の五悪段という普段ほとんどお勤めすることのない場所を開いて庄松さんの前に突き出しました。

周りの人は庄松さんが意地悪をされているのが分かりますから、どうなるのかと心配してみておられた。

すると庄松さんはスッとそのお経さまを頂くと「“庄松をたすけるぞ”と書いてあるわい」とおっしゃったそうです。そのお坊さんは二の句が継げませんでした。周りにおられた方もすばらしい読み方だと慶ばれたり安心なさったりされたというそんな事があったそうであります。

お経を読む。お経に遇わせていただくというのは先だたれた方をお偲びするけれども、その方々が阿弥陀さまと一緒になって今の私を「必ず支えてるよ」と護り続けてくださっているおはたらきのあらわれだといただくのであります。

お念仏やお勤めをさせていただくということはこちらから阿弥陀さまや先立たれた方への一方通行ではありません。私のお勤めやお念仏の根源に阿弥陀さまや先立たれた方の「お前さん必ず支えてるで」というおはたらきがあってくださっておるのであります。私たちは庄松さんのお言葉をお借りして、お勤めをしながら、お念仏をしながら阿弥陀さまや先立たれた方が、私の場合なら「慎行をたすけるぞ」と云うてくださってんねんなぁと安心させていただくのであります。

お経さまやお念仏さまは只の言葉ではなく阿弥陀さまやご往生くださった方々の私を支えてくださっている喚びかけのあらわれなのであります。　合掌